

## 地域研究と境界研究の「境界」～ABS ヒューストン大会に参加して～

スラブ研究センターに GCOE 学術研究員として着任してから 1 年が経つ。小生は、センターに着任する前から中央アジアの越境河川や流域圏の歴史を研究しており、自分は「境界研究者」だと自負できる立場にはある。ただ、センターに来るまでそれを意識したことは全くなかった。むしろ、ソ連時代から今日までの中央アジアを研究する「地域研究者」だと思い込んできた（それよりも、「ソ連史研究者」という響きのほうが個人的には心地よいが）。スラブ研究センターは GCOE（境界研究）や新学術領域（比較大国論）という狭義の地域研究の枠をはみ出す巨大プロジェクトを抱えており、今では純然たるスラブ・ユーラシアの地域研究者が集まる研究機関とは言い難い。それでも、ロシア・インド・中国・韓国・ベトナムなど様々な地域をフィールドとする同僚との議論の中で、センターでは「地域研究とは何ぞや」ということを常に考えさせられるし、また、折に触れて自分の意見を述べてきた。

しかし、幸か不幸か知らないが、小生自身が「境界研究とは何ぞや」という議論をセンターでしたことは未だかつて「ない」。つまり、境界研究に関する自分の考えがまとまっていないうまま、境界研究の国際学会の場に飛び込んだわけである。直前に報告準備をしたこともあり、ほとんど寝ずして完全に頭が呆けた状態で参加した ABS ではあったが、「境界研究とは何か」、「境界研究と地域研究の関係性とはどのようなものか」ということを考える上で個人的には非常によい機会であった。このような機会を与えていただいた北大 GCOE と拙いプロポーサルを受け付けてくれた ABS に感謝すると共に、ヒューストンの地で感じた雑感を記すことで、ABS の参加記としたい。

大会初日、午後のセッションから参加する。“Immigrants and Refugees Extraordinary Energy”というタイトル。Christine Marston 女史による、ミャンマー（カレン族）とソマリアからの難民に対してコロラドの一都市でどのような社会統合が図られているのかとの社会学的な内容の報告をまずは聞く。次の二人の報告の内容は記憶にないのだが、その次は GCOE 前助教の池直美さんによる、サハリンの高麗人の韓国による受け入れ政策に関する報告を聞いた。彼女のバックグラウンドは政治学である。しかし、両報告とも物理的・社会的な境界を跨ぐ現象を扱ってはいるが、研究対象の「地域」にどっぷりつかった上での報告である。「地域研究」と言っても全く差し支えない「境界研究」の報告だった。

大会初日、次のセッション。我が GCOE ヘッドの岩下明裕先生、GCOE 発行の Eurasian Border Review 誌の校正で腕をふるう Paul Richardson 氏の報告、東フィンランド大学カレリア研究所の Jussi Lane、James Scott、Ilkka Liikanen 氏の報告を聞く。“Reframing Eurasia’s Borders”というタイトルで、欧州から東アジアまでのユーラシアの国際関係を再構成する、完全な国際関係論のセッションである。前のセッションの内容とは完全に隔たっており、抽象的な議論も多く、境界研究とは何か、完全に頭が混乱する。

そして、花松・平山・地田による GCOE 若手 3 人によるセッションが続いた。期せずして 3 人とも東北アジア（ロシア）、北ベトナム、中央アジアの中国との境域にかかわる報告となった。小生と平山氏は歴史学を専攻、花松氏は国際法の専門家である。ここで、岩下先生より、今日のユーラシアの境界について考える上での中国ファクターの重要性についてコメントがあった。さらに、コメンテーターである地理学者の Christopher Brown 氏よりは、流域圏管理の比較に関するコメントをいただいた。



ここで、前のセッションで抱いた混乱が徐々に氷解してきた。筆者も含めて、境域に密着する形で境界研究を行う者は、各人のディシプリンに依拠しながら、ミクロな地域—社会的境界について言うならば、ミクロな「対象」ということになろうか—に関する知を、フィジカル／ソーシャルな境界を軸として接合することで、メゾな地域（対象）に関する知を構成するという作業を行うことになる。これは、地理学者、政治学者、社会学者、歴史学者などの仕事ということになろう。このようなメゾな地域に関する知を、より大きな文脈の中、つまりユーラシアといったメガな地域の知に接合し得るのが地政学とか国際関係論のディシプリンを持つ境界研究者ということになろう。そして、メゾ・メガな地域の知に比較の視座を持ち込むことで、よりグローバルな視座で自らが扱う境域を眺めることができる。ここに境界研究のグローバル化が生じる。逆に言うと、比較なき境界研究はその面白さも半減する。

昨年 11 月に行われた GCOE 冬季シンポジウムの中で、ある報告者が「地域研究と境界研究は相互補完的」と発言したのを記憶している。今回 ABS 年次大会に参加して実にその通りだと思った。当たり前といえば当たりの話だが、ミクロな地域の知なしには、跨境するメゾな地域の知も、より大きなメガな地域の知も成立し得ないのである。境界研究のもつマルチ・スケールな性質ゆえに、豊かな比較可能性と比較を通じての一般化・理論化の可能性も開かれていると言える。

ABS 最終日の早朝セッション“Crossing Borders, Creating Connections”に参加して、この思いをさらに強くした。Stephen Mumme 氏は米墨越境地下水の商品化について、我々のセッションのコメンテーターを務めてくれた Christopher Brown 氏は米加越境河川であるレッド川の国際河川管理の問題について論じた。特に、後者の報告は、傾斜が緩く春季に融雪水

が引き起こす洪水が大問題の河川についての報告であり、同じ問題を抱える中央アジアやロシアの河川管理との比較可能性があるように感じた。また、Donna Lybercker 女史の報告の中での、フェイスブックやツイッターといった新しいメディアが若者層の物理的・社会的境界を弱めるよりもむしろ強める働きをしているという指摘は刺激的だった。このテーマも日本の「2ちゃんねる」での言説などと比較し得る。

しかし、境界をめぐる問題は複雑化している。2011年のABS Book Awardの金賞を受賞したNick Vaughan-Williams氏は、2日目のレセプションの際に行われた記念講演の中で、国境をgeopoliticsだけでなくbiopoliticsからも捉える必要があると指摘するなど、ポスト構造主義的な議論に照らせば、従来の国境の概念は脱構築・再構成されるはずだと述べた。これも当たり前と言えば当たり前の話なのだが、このような新たな国境・境界へのアプローチがどのような形で研究成果の中で具体化されてゆくのか、今後の境界研究の新たな展開に注目である。

思えば、ヒューストンという街自体が「境界現象」の縮図のようだった。街中には巨大なオイル・メジャーのビジネスビルが立ち並ぶ一方で、物乞いの黒人がメインストリートを徘徊するのを頻繁に目にした。メキシコ国境が近く、街中ではスペイン語の表記も多い。ジョージ・ブッシュ国際空港は中南米へのハブ空港で多くの日本人はヒューストンの街をスルーして中南米へと向かっていった。こんな街のハンバーガー屋でトリプル・チーズバーガーを頬張り（店主に“Challenger!!”と言われた）、パブでとにかく安くて美味しい琥珀色の地ビールを飲みながら、地域研究と境界研究の「境界」、こんなことを考えた。



地田徹朗（GCOE 学術研究員）